

"How does one get ideas? By sheer perseverance to the point of madness."

Charles Chaplin

「どうやってアイデアをつかむか？ それは発狂寸前になるほどの忍耐によってである」 チャールズ・チャップリン

前回に引き続きチャールズ(チャーリー)・チャップリンの自伝からです。チャップリンはやがて自分で脚本を書き、監督・主演するようになり、人気は急速に高まりました。そうなるとインタビューなどで、喜劇のアイデアをどこから得るのかを質問されることが多くなりました。それについて彼は後年、「いまでも満足に答えることはできない」と前置きしながらも、「長いあいだの経験から、アイデアというものは真剣に求めれば得られることがわかった」と言い、「たえず求めていると、いわば心が想像力をかきたてるような出来事を見張る物見やぐらになり、一片の音楽や日没の光景がアイデアにイメージを与えてくれることがある」と説明しています。そこで忍耐力、つまり「苦痛に耐えて長時間集中していられる能力」を身につけることが必要だと言うのです。また、キーストンのスタジオで合い言葉のように飛び交っていたのは「驚きとサスペンス (surprise and suspense)」という言葉だったということです。新鮮な驚きと、わくわくさせる緊張感は、映画のみならず、芸術のあらゆる分野で大切な要素とされていますが、チャップリンのあのおどけた動作の陰には、それを生み出すための死にもの狂いの努力があることを改めて感じさせられます。



ここで、チャップリンの役作りの上に大きな影響を及ぼしたと思われる生い立ちに触れることにいたします。両親ともロンドンの寄席芸人で、彼は幼いときから舞台を見て育ちました。父はかなりの出演料をもらう役者でしたが、そのほとんどを劇場のバーの飲み代にしてしまった上、次第に暴力を振るうようになりました。母は小間使い役専門の女優で、愛敬のある魅力的な人でしたが、夫の暴力に耐えられず、チャーリーが1歳のときに離婚を決意し、チャーリーと兄のシドニーを一人で育てることになりました。

チャーリーが5歳のとき、母は喉頭炎を悪化させ、舞台上で声が出なくなって客の嘲笑を浴びるという事件が起こりました。そこでチャーリーが代役として舞台に連れ出されて当時の人気の歌をうたい、やんやの喝采を受けたのです。さらに踊ったり物まねをしたりすると、小銭の雨が降りました。しかし、ついに声は回復せず、母はその日を最後に舞台を退き、ミシンを使って仕立物など始めましたが生活は苦しくなるばかりでした。そんな中でも朗読の上手だった母は、ナポレオンのエピソードや聖書の話など演技をまじえて語ってくれ、幼い彼の心に忘れられない思い出を残しました。

生活はいよいよ逼迫してついに食べるものが何もなく、母子3人で貧民院に入ることになりました。やがて母は栄養不良から精神に障害を来し、精神病院に入院しました。けれども、どんな境遇になっても、シドニーとチャーリーは俳優になるという目標を失いませんでした。12歳のときチャーリーは子役に応募し、「シャーロック・ホームズ」の地方巡行でボーイの役をもらって好評を博し、この興行が当たったこともあって、俳優としての道が開けたのです。やがてシドニーも一座に加わったので、兄弟一緒に巡業することができました。そのうち母も退院し、つかの間でしたが親子の生活も楽しめました。

「チャップリンは世界じゅうを笑わせ、泣かせた」といわれるように、彼の演じる喜劇の人物の中にはいつも哀愁と孤独の影があったのは、このような少年時代の経験が影響しているのかもしれませんが。